

2. 弱視特殊学級

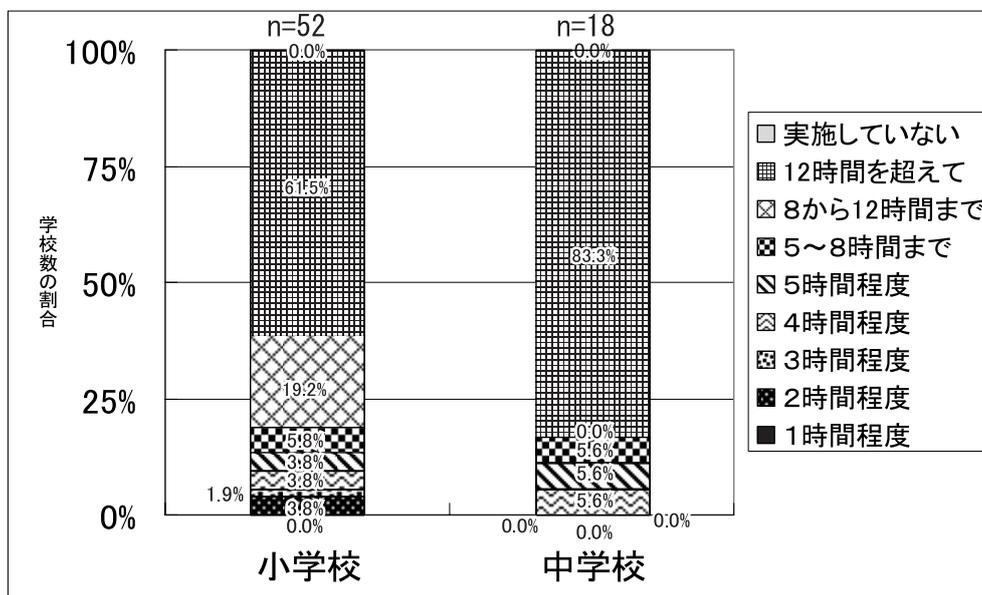
(1) 交流及び共同学習の実施状況

①実施状況

図Ⅲ 2-1 に、弱視特殊学級（以下、弱視学級という）に在籍する児童生徒の交流及び共同学習に関し、1週間あたりの実施回数を示した。

小学校、中学校共に最も割合が高かったのは、「12時間を超えて実施している」であった。小学校で次に多く選択されているのは「8時間から12時間まで」で、この2つで全体の80%を超えている。

中学校では「12時間を超えて実施している」が全体の80%以上の生徒で選択されており、他は、「4時間程度」、「5時間程度」、「5時間から8時間」が、それぞれ5%程度が選択されていた。



図Ⅲ 2-1 交流及び共同学習の1週間あたりの実施時数

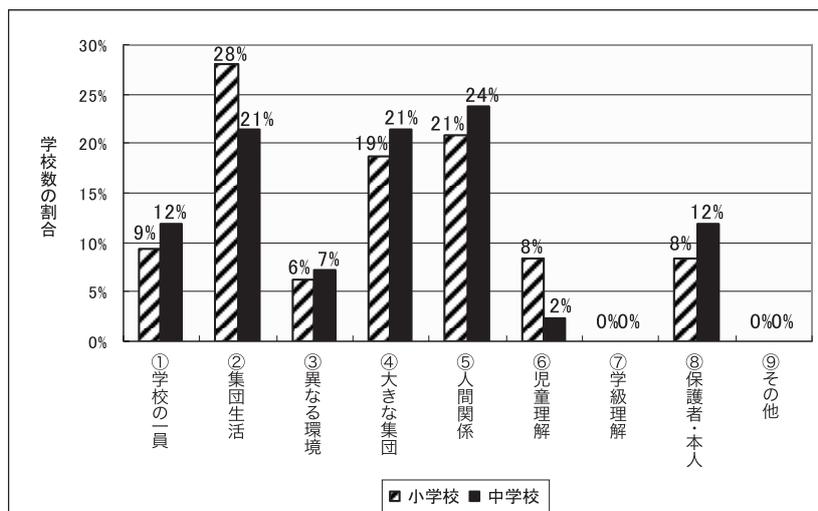
②目的・ねらい

図Ⅲ 2-2 として、弱視学級における交流及び共同学習のねらいについて示した。

この項目については、「その他」を含む10の選択肢から、特に重要と考えられる事柄3つを選択してもらった。

その結果、小学校においては、「集団生活で社会性を培う」、「校内でのつながりや人間関係を形成する」、「より大きな集団で学習を経験し、学ぶ力を培う」が高い割合で選択された。

また、中学校においても、順序は異なるが、「校内でのつながりや人間関係を形成する」、「より大きな集団で学習を経験し、学ぶ力を培う」、「集団生活で社会性を培う」の3つが高い割合で選択され、小学校と同じ傾向を示した。



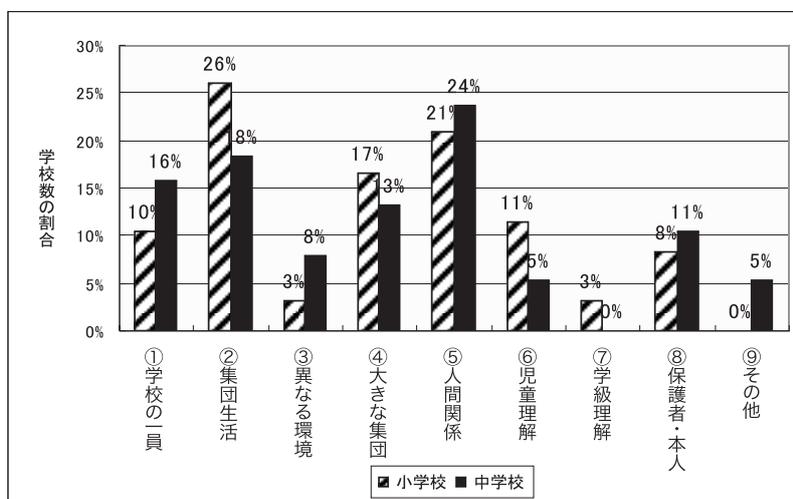
図Ⅲ 2-2 交流及び共同学習のねらい

③ 成 果

図Ⅲ 2-3 に、弱視学級における交流及び共同学習の成果について示した。これも、「その他」を含む10の選択肢の中から、あてはまる事柄3つを選択してもらった。

その結果、小学校においては、「集団生活で社会性を培うことができた」、「校内でのつながりや人間関係を形成することができた」、「より大きな集団で学習を経験し、学ぶ力を培うことができた」の3つが高い割合で選択された。これは、②目的・ねらいの項で選択されていた事柄が、成果としても挙げられている結果となった。

中学校においては、「校内でのつながりや人間関係を形成することができた」、「集団生活で社会性を培うことができた」、「学校の一員であることを互いに確認できた」の3つが多く選択された。「学校の一員であることを互いに確認できた」以外の上位2つは、やはり②目的・ねらいの項で選択された事柄が、成果としても選択されていた。



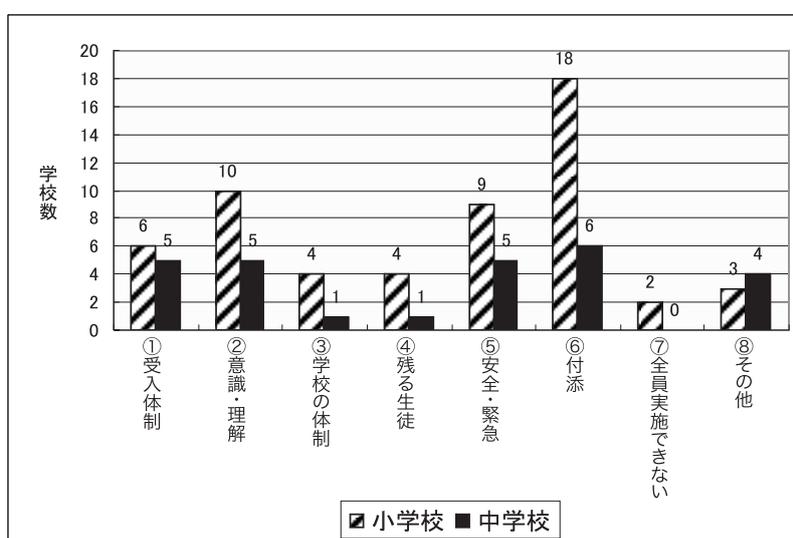
図Ⅲ 2-3 交流及び共同学習の成果

④課 題

図Ⅲ 2-4 に、弱視学級における交流及び共同学習の課題について示した。これは、「その他」を含む10の選択肢の中から、当てはあるもの全てを選択してもらったものをまとめたものである。

小学校については、「特殊学級担任の付き添いの問題」が他の項目の倍近い割合で選択され、これに「交流先の学級の担任や児童生徒の意識や理解について」、「安全確保・緊急対応の問題」が続いている。

一方、中学校においては、総数は少ないが、「特殊学級担任の付き添いの問題」、「交流先の学級の受け入れ体制について」、「交流先の学級の担任や児童生徒の意識や理解について」、「安全確保・緊急対応の問題」が、ほぼ同じ割合で選択されている。



図Ⅲ 2-4 交流及び共同学習の課題

(2) 交流及び共同学習における児童生徒への配慮の実際

次の3つの条件に合う児童生徒を選び、その児童又は生徒（以下Aさんと記す）に対する交流先での配慮の実際について記述してもらった結果をまとめた。3つの条件とは、平成16年度に通常の学級と交流し、教科学習の経験がある、在籍する生徒のうちもっとも高学年であること、障害やその程度は問わない、である。

各学校における交流の実態は様々であり、重複する障害の有無やその種類によって、配慮が異なる傾向が見られたので、障害種別ごとに自由記述を整理し、特徴的な回答内容を抜粋して挙げた。

① Aさん自身への配慮

- ・担当教師の入り込みによる支援をおこなった。
- ・拡大教科書、拡大教材、点字化した資料を準備した。
- ・座席を前列に配置し、指導のしやすさ、本人が黒板へ近寄りやすさを保障した。
- ・ルーペ、単眼鏡などの視覚補助具を活用した。

- ・板書事項を読み上げ、指示代名詞は使わないようにしてもらった。
- ・グループを作る際に、仲間はずれにならない配慮をしてもらった。
- ・交流級で学んだことの補充、補足を学級に戻ってから担任とともに実施した。

②施設設備など環境への配慮

- ・傾斜机、書見台、(黒板の近くに) 予備の机の用意してもらった。
- ・電気スタンド等の個別照明を用意した。
- ・拡大読書器、パーキンスプレーヤーを用意した。
- ・視覚補助具等を入れるボックスを用意した。
- ・黒板に照明を設置してもらった。
- ・階段等の段差の角に目立つテープを貼付してもらった。

③学級の他の児童・生徒への働きかけなどを通して行う配慮

- ・視覚障害について、見えにくさ、全盲児への接し方について説明した。
- ・手引きの仕方を指導した。
- ・教室移動の際の送迎、転倒した時の補助を行うことを指導した。
- ・ロービジョン体験(シミュレーション)を実施した。
- ・弱視を総合的な学習の時間(4年)の内容として実施してもらった。
- ・Aさんは右目だけで見ているので、二列に並ぶ時左側に来て、右手をつなぎたがることを伝えた。

④その他

- ・自分でできることが増えてきたので、本人が本当に困っている時だけ支援するようにした。
- ・学級通信を出して実情を伝えていた。

(3) 交流及び共同学習についての意見等

弱視学級における交流及び共同学習についての自由記述を次のようにまとめた。

①交流及び共同学習の意義

<小学校>

- ・同年齢の友達と学び会える唯一の場である。

<中学校>

- ・交流級で活動することにより、仲間意識が生まれる。

②交流及び共同学習の成果

<小学校>

- ・校内、地域へと障害への理解が深まっていった。
- ・仲間意識が生まれてきている。
- ・集団での活動が、経験不足を補い良い刺激となっている。

＜中学校＞

- ・記述無し。

③交流及び共同学習を実施するにあたり必要なこと、配慮すべきこと

＜小学校＞

- ・共通理解と連携が大切である。
- ・個別指導と交流での学習との使い分けが大切である。
- ・特定の教科等の固定指導ではなく児童の実態に応じた柔軟な対応が必要である。
- ・付き添いにおける児童の自立を支援する対応、及び指導者との連携が必要である。
- ・実技教科等における安全の確保が大切である。

＜中学校＞

- ・他の生徒との交流が持てるような指導体制を確保することが必要である。
- ・良好な人間関係を形成できる配慮が必要である。

④交流及び共同学習の実施上の課題、及び実施を困難にしている要因

＜小学校＞

- ・交流学习と個別指導との兼ね合いの難しい。
- ・交流級担任との連携、打ち合わせの時間の確保と突発的な予定の変更への対応が難しい。
- ・授業場面、及び休み時間等における他の児童との関わり合いが難しい。
- ・交流活動に対する全職員の共通理解、他の児童への指導が難しい。
- ・教室移動等、時間的ゆとりがなく、本人の負担が大きくなっている。

＜中学校＞

- ・生徒が複数在籍している場合、付き添いの体制が難しい。
- ・生徒が思春期に入っていることもあり、補助に付き添うことを嫌がっている様子が見えがえる。
- ・通常学級在籍で配慮が必要な生徒に加配がないことが実施を困難にしている。

(田中 良広)